

## 〈シンポジウム〉

## 「詩 と／は／が 私」

---

中 崎 一 夫

---

以下、2011年12月17日、池袋キャンパス12号館、第1／第2会議室に於いて開催された立教英米文学会でのシンポジウムの概略を報告する。

題目：「詩 と／は／が 私：現代詩の現在」

内容：中崎一夫の散文詩「言葉の主題による詩三篇」（立教大学広報誌『立教』1992年夏号（言葉特集）に寄稿）をテキストにして、朗読と対談を挿みながら、詩の言葉の問題を実作の立場から考える。とりわけ、この度の東北大震災で多くの詩人や作家が言葉を喪失している状況にもリンクして考えてみる。

講師：中崎一夫（なかさき かずお）詩人。（田村英之助（たむら えいのすけ））

朗読・対談：太田雅孝（おおた まさたか）1975年立教卒。大東文化大学教授・詩人。

伊達恵理（だて えり）1984年立教卒。詩人・作家（葉越晶）

講師略歴：田村英之助 1954年、東京大学卒業。1957年、東京大学大学院修士課程修了。1977年より立教大学文学部英米文学科教員（～1996年）。イギリス詩を研究する一方で、詩人「中崎一夫」として詩の

実作を行う。現在 立教大学名誉教授。

著書・訳書に、イギリス詩の研究者田村英之助として『キーツ詩集』（思潮社1966年）、『ジョン・キーツ：詩人の手紙』（富山房1977年）、『幻実の詩学—ロマン派と現代詩』（ふみくら書房1996年）など。詩人中崎一夫として詩集『鳥獣戯画その他』（思潮社1966年）、『視差その他』（国文社1984年）、『幻化 その他』（詩学社2000年）など。

（編集委員会記）

☆ ☆ ☆

テキスト：中崎一夫『言葉の主題による詩三篇』（原文縦書き）

# ①ばべる・だぶる——ある創世記

あのバベルの塔の騒動を疑似体験シミュレーションできたら おもしろいと思わないか  
でも大変だな なにしろ創世記には 言葉がすべて通じなくなったとある  
だけで これじゃ何もわからない 多少とも細かい状況設定は なにもない  
いんだから

いったいどんな風に通じなくなったのか いろんな状況が仮定できるよね？  
バベルの町の住民めいめいの言葉が みんなちがう言葉になっちゃったのか  
それとも 家族とか職業とか社会集団同士で通じなくなったのか 通じな  
くなったのは ぜんぶの単語がいちどになのか あるいは すこしずつなの  
かとか——

そう言えばイオネスコの『犀』は たしか 市民が毎日何十人だか何百人だ  
かずつ犀に変身してゆく話だ

おなじように 十語とか二十語ずつ言葉が通じなくなってゆく状況なんてい  
うのは あれこれ想像するだけでも ぞくぞくするほど面白い

〈真実〉という言葉が昨日通じなくなり 今日は〈愛〉が通じなくなりかけ  
ている 明日は〈神〉ではないかとか—— 〈天国〉や〈平和〉がすで  
に通じないのに 〈地獄〉や〈戦争〉はまだ通じたり さいごまで通じたの  
は 動詞か名詞か修飾語か ただの感嘆詞みたいなものかとか—— 考え  
るときりがない

きりがいいから いちばん劇的な状況を考えてみよう それはなんていっても 自分の言葉が自分に通じないって状況だ 他人同士で通じないなんてのは いつどこでもありふれたことで べつに悲劇的でも喜劇的でもない夫婦や恋人や友人同士なんていうのは わざと通じないふりをすることもあるくらいなんだから そうだろう？

創世記では〈彼らの言葉を乱し 互いに言葉が通じないようにしよう〉って神様が言っていて 他人同士で互いに通じなくなるようにかかれているんだが 現代では ひとりの人間の中にふたりの自分がある と考えるのは常識だから 今日のわれわれとしては ふたりの自分同士で互いに言葉が通じない という状況を想定してもいいわけだ

たとえば 現にいまかいているこの詩ね この詩のぜんぶではな いまでも いくつかの重要な言葉がもうひとりの自分に通じないなんて状況はおおいに考えられるんじゃないだろうか いま言っただけの〈現代〉だとか〈常識〉なんて単語が 通じないような状況だ

え 通じるって？ よかったあ ほら 昨日きれいに清書したこの原稿ね これで締切りに間にあうって安心してたのに いま読み返してみたら どうもぴんとこない単語があちこちあって 自分でかいたって気がしないんだ 参ったなあ これじゃ出せないもの これをかいたのはきみじゃないのか もうひとりのナカザキ君 こっちのきみにろくに相談もしないで？

## ②事物になりたがっている言葉と

言葉になりたがっている事物

事物になろうとして 言葉は肉をまとった

くるぶしが茨の棘と絡みあったとき 肉化したばかりの芳ばしい皮膚に 降り始めた雨のように 一筋の血が滲んだ 言葉は肉であることの歓喜で戦慄した

肉は血の袋であった 手足は 大きい袋から突き出た小さい袋であった 小さい袋たちは些細なことで出血した

言葉になろうとしている肉たちも 時おり出血したが彼らは血を流すことが苦痛であった肉たちは言葉になろうとして しきりに乾いた唇をなめ開閉した

唇から出ていく音たちは 枝にもどれない枯葉のように風の掌に追われて囁きながら散っていった

言葉になろうとした肉たちは 肉である言葉に敵意を抱いた 言葉への意志を自から裏切って 行為の徒と化した

肉である言葉は 言葉になろうとした肉たちによって頭に棘の輪をのせられ地面から少し高いところに吊された 大きい血の袋を行為の槍に刺されて死んだ

それ以来 (時によみがえりはあるものの) 言葉が肉をまとうことは大層むずかしくなった

### ③口に関する覚え書

かれらののどは 開いた墓であり――

口は もと傷だったにちがいない

食道から肛門まで 人間を垂直につらぬく深い傷の 上端だったにちがいない

今も 完治したわけではなく 開いたまま 生乾きしているにすぎない  
唇の紅さを みるがいい

愛しあうものたちは あいての傷口が気になって くちづけで 癒しあおうとする だがそのために 傷の紅さは いよいよ鮮やかになるのだ

いいたいのが ことばだったのか ちんも  
くだったのか わからなくなることがある

人間と鳥のちがいは <sup>ひと</sup>なによりもまず口にある 鳥の嘴のように固く治り  
 きらないかぎり 無心に囀ることは できない ひとこと喋るごとに  
 心がいたんだり 恥ずかしくなったり するのだ

クチは とびたったことばのとり  
 たちが にどと かえらない巢だ

言葉について ひとみしりする者は 花のことを〈ハナ〉と言えずに 黙る  
 ことがある

花と話してみなければ ほんとに〈ハナ〉なのかどうか わからないと思っ  
 てしまうからだ

それは 鳥についても 樹木についても 愛についても おなじだ

〈天使なら もともといないか  
 ら 気軽に口にできるが——〉

最初に以上の詩3篇を、太田雅孝氏、伊達恵理氏、中崎の3名で朗読。

ややこしい演題「詩 と／は／が 私」とは、自分と詩（言葉）がのっぴき  
 ならぬ関係を持つものであることを端的に示そうとしたものであるという中崎  
 の発言。そして、10箇月前の東北大震災で、詩人や作家はもちろん、多くの  
 人びとが、新聞や雑誌で伝えられたような言葉を喪失した深刻な状態に陥った  
 背景には、これらの詩に示されたような、人間と言葉の本来的な困難な関係が  
 あり、その深刻な表れに他ならないという発言があった。

（中崎一夫）